

平成二十三年学力検査

全日制課程 A

第一時限問題 国語

検査時間 九時十分から九時五十分まで

「解答始め」という指示があるまで、次の注意をよく読みなさい。

注 意

- (一) 解答用紙は、この問題用紙とは別になっています。
- (二) 「解答始め」という指示で、すぐ学科名と受検番号をこの表紙と解答用紙の決められた欄に書きなさい。
- (三) 問題は(1)ページから(6)ページまであります。(6)ページの次は白紙になっています。受検番号などを記入したあと、問題の各ページを確かめ、不備のある場合は手をあげて申し出なさい。
- (四) 答えはすべて解答用紙の決められた欄に書きなさい。
- (五) 印刷の文字が不鮮明なときは、手をあげて質問してもよろしい。
- (六) 「解答やめ」という指示で、書くことをやめ、解答用紙と問題用紙を別々にして机の上に置きなさい。

学科名				
科				
受検番号				
第				
番				

国語

一次の文章を読んで、あとの(一)から(六)までの問いに答えなさい。

著作権の関係で
画像処理を
施しています。

著作権の関係で 画像処理を 施しています。

(一) ① 晩鐘にふさわしい とはどのような様子を表しているか。その説明

として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

- ア 一日の終わりをしみじみと感じさせる様子
- イ 寺の鐘のようにありがたく聞こえる様子
- ウ 日中よりも足りなく感じられる様子
- エ 離にあえない無念さがにじみ出ている様子

(二) ② 孤高をたのしむおもむき とあるが、その説明として最も適当なもの

のを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

- ア 周囲の自然破壊にも一匹だけ平然としている状態
- イ 自然と一体化して情趣を深く味わおうとする境地
- ウ 一人暮らしの自分を励ましてくれるような雰囲気
- エ たった一匹で鳴くことを誇らしく思っている様子

(三) ③ にあてはまる最も適当なことばを、第三段落の文章中か

らそのまま抜き出して、八字で書きなさい。

(四) ④ 聴く文化 とはどのような文化か。それを要約して、五十文字以上六十文字以下で書きなさい。ただし、「多様な音」、「根底」という二つのことばを使って、「聴く文化とは、……」という書き出しで書き、「……文化である。」と結びなさい。二つのことばはどのような順序で使ってもよい。

(注意) ・句読点も一字に数えて、一字分のマスを使うこと。

・文は、一文でも、二文以上でもよい。

(五) 筆者は、高尾山の静けさの中で過ごすような気持ちになると述べているか。その最も適当なことばを、本文中からそのまま抜き出して、七字で書きなさい。

(六) 次のアからエまでの文の中から、その内容がこの文章に書かれていることに最も近いものを選んで、そのかな符号を書きなさい。

- ア 東京の近郊では、今でも雨の音に静寂を感じとることができる。
- イ 静けさは、大自然の多様な音が大きくなればなるほどきわだつ。
- ウ 日本人の多くは、静寂が奪われていく恐ろしさに気づいていない。
- エ 都市の住人は、大自然の多様な音が静けさを妨げると考えている。

二 次の文章を読んで、あとの(一)から(六)までの問いに答えなさい。

〔本文にいたるまでのあらすじ〕

廃校が決まった中学校の三年生のぼく(長谷川優太)は、膝の故障で得意なサッカーをあきらめ、モー次郎(山田幸次郎)とともに、姫と呼ばれている岡本眺人しか部員のいない水泳部に入部する。姫は県の記録保持者だが、突然水泳部をやめると言い出し、顧問のウガジン(宇賀神先生)は怒って部の解散を命じてしまう。その後、水泳部に戻りたいと申し出た姫に、ウガジンは復帰の条件として、三人でのトライアスロン大会への参加を提示する。

〔本文〕

① 「じゃあ、今日のところは帰りますね。失礼しました」姫が職員室の出口へ向かった。ぼくとモー次郎も続く。ところが、ウガジンがトライアスロン大会の申込書をひらひらさせながら追いかけてきた。「ちよつと待て、おまえら。これをよく見てみる。この第一回桜浜ジュニアトライアスロン大会はな、たくさん参加者を募るためにいろんなローカル・ルールがもうけられているんだよ」「ローカル・ルール？」なんのこともわからずに、ぼくは聞き返した。「簡単に言えば、この桜浜の大会だけの特別ルールだ。今大会にはそのローカル・ルールのひとつとしてリレー部門があるんだよ。スイム、バイク、ランに一人ずつ出て、リレーをするんだ。つまり、三人ひと組のチームとして参加できるんだよ」「なるほど、それならばおれがスイム担当で出りゃいいってわけですな」姫がさつそく飛びついた。「さすが岡本。話ののしみ込みが早い」ウガジンは拍手で姫を褒めたたえる。姫はモー次郎の肩をたたいた。

「おまえはいつも自転車で牛乳配達してるからバイク担当でいいよな」
「もちろん。自転車なら自信があるよ。毎朝三時間は自転車に乗ってるからね」「三時間か。すげえな。オーケー。それじゃ、ラン担当は優太ということだ」「ちよつと待てよ」話がどこまでも勝手に転がっていきそうなので、ストップをかけた。「なんだよ優太」「勝手に決めるなよ。トライアスロンに出場するなんて、ひと言も言っていないだろ」そもそもぼくは一人三競技だろうが、一競技だろうが、^①最初から出るつもりはなかった。「いいじゃんか。おれを助けると思っただけよ」なれなれしい口調で語りかけてくる姫を無視して、ウガジンに詰め寄った。「先生はぼくの膝が悪いことを忘れたんですか。ちよつと走るくらいならいいですけど、優勝なんて絶対無理ですよ。もし優勝したいんだったら、ぼくをメンバーからはずしてください」

② 「おい、優太」いきなり姫に腕をつかまれて、職員室の外まで連れていかれた。「痛い。なんだよ」姫の手を振りほどく。「落ち着けよ。冷静になれ。いいか？ おれの水泳部復帰のために優太を巻き込んだのは悪いと思ってるよ。でもな、ウガジンはおれの復帰の条件として、トライアスロン大会への参加を言ってきただけなんだよ」「うん？」「つまりな、優勝しなきゃだめとは言っていないだろ」そう言われればそうだ。「おれたちはトライアスロン大会に参加すればそれでいいんだよ。優太はただら走ってくれるだけでいいのさ。そもそもさ、トライアスロン大会は全中のおとなだぜ。全中に出られさえすれば、そのあとのトライアスロン大会でピリを取ろうが、途中で棄権しようが、関係ないってことだよ。学校がなくなるんだかなんだか知らないけど、卒業しまうおれたちには関係ないよ。おれたちはただ出ればいい。わかったか」

姫の言っていることはわかった。でも、迷った。たとえランパートだけにしても、膝の悪いぼくがトライアスロン大会に出るわけにはいかない。クラスのやつや、サッカー部のやつらに、出場することを知られたら都合が悪い。なんだよ走れるんじゃないか、なんて後ろ指さされることになる。ぼくの膝は壊れたことになっているのだ。「やつぱり無理だよ。

膝が悪いから」へい」すると、姫の顔から表情がさつと消えた。視線はぼくの目に固定されたまま一ミリも動かない。そして、その瞳がぞくぞくとするほど冷たいのだ。一瞬にして鳥肌が立った。(中略)

③ 「おまえさ、もう猿芝居はやめろよ」冷たくて乾いた声だった。「なにが芝居なんだよ」「膝が悪いなんてうそをつくのはやめろ」一瞬、息が止まった。「うそじゃないよ」「本当は痛くなんかんだろ」「痛いけど我慢してるんだよ。痛くないふりをしようって努力してるんだ」「へい」「ちがうだろ。痛いふりをする努力してるんだろ」「そんなことないよ」「言い訳はしないでいいぜ。前から思ってたんだけどさ、うそついでるのミエミエだぜ」「いいかげんなこと言うな」「いいかげんなのは優太だろ。膝が痛い、痛いって言うわりにはよ、帰りのホームルームが終わった瞬間にダッシュで帰ってるじゃん。おかしいだろ。というかさ、きつとクラスのやつらもおかしいって気づいてるぜ。気づいてないのは優太自身だけじゃないのか」「へい」「なあ、優太。おまえ、なんか逃げたいことがあるんだろ。そのために膝が痛いって言う言い訳を用意してあるんだろ。ちがうか」「そんなんじゃないよ。本当に痛いんだ」「去年からおまえには水泳部に来てもらってるわけだけどよ、おまえのタイムどんどんよくなつてたぞ。どつか故障してるとは思えないくらいにさ」「適当に話を作るなよ」「おれタイム計ってたもん。それ

に、おれくらい水泳を長くやってれば、泳ぎ方を見ただけでも故障を抱えてるかどうかくらいわかるもんさ」思わずあとずさりした。姫はいままでぼくの膝のうそを見抜いておきながら、ずっと黙っていたというのか。「ぼくは本当に膝が痛いんだ。マジで走るのは無理なんだ」「なんでもかんでもすぐに無理だ、無理だって言いやがって」姫がにじり寄ってくる。

④ 「どうしたおまえら。いつまでも廊下で」がらりと職員室のドアが開いて、ウガジンが出てきた。助かった。ウガジンに泣きつく。「先生。やつぱりランパートは無理です。トライアスロンには出られません」

「でもなあ……」「なんなら、ぼくが必ずかわりのランパートを探します。それじゃだめですか」姫の視線を頬に感じつつ懇願した。ウガジンがしぶしぶ答える。「優太がちゃんと責任もって探すというんだな」

「はい」「それならいい」「ありがとうございます」(中略) やつと安堵の息をつく。横を見ると、姫が冷ややかな目でぼくを見ていた。「うそつき」とその目は語っていた。(関口尚『空をつかむまで』による)

(注) ○ [1] [4]は段落符号である。○ トライアスロンは一人の選手が水泳・自転車・マラソンの三種目を一日で行い、総計の時間を競うレース。

○ 全中^①ここでは、全国中学校水泳競技大会のこと。

① 最初から出るつもりはなかった。とあるが、その理由として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア 自分で勝手に水泳部をやめておきながら突然復帰したいという気まぐれな姫には、もともと協力する気持ちはなかったから。
イ 県の記録保持者だからといって、姫を水泳部に戻すために自分たちまで巻き添えにしようとするウガジンに腹が立ったから。

ウ 膝が悪いことになつてゐる自分が大会に出て走つたりすると、周りからうそをついてゐたと悪口を言われる心配があるから。

エ トライアスロンにランパートがあることは知つていたので、運動を禁止されてゐる自分では力になれないと思つていたので、

(二) ② 鳥肌が立つた とあるが、ここではどのような気持ちを表してゐるか。その最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア 失望 イ 興奮 ウ 恐怖 エ 後悔

(三) 本文中の(へ1)から(へ3)のそれぞれにあてはまる最も適当な文を、次のアからウまでのの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア 血の気がさつと引くのが自分でもわかつた。

イ ぼくは左膝をさすつた。

ウ 苦笑いで断つた。

(四) この文章に描かれてゐる姫の人物像の説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア 人を見下したような態度をとつてはいるが、友達思いで気だての優しい人物

イ 親友のぼくやモー次郎にさえも気を許さず、自分の意志を貫こうとする人物

ウ 自分の感情や本心を決して表に出さず、周囲には不可解な印象を抱かせる人物

エ 軽い調子でふるまう一方で、ぼくの偽りや後ろめたさを鋭く見抜いてゐる人物

(五) ③ 思わずあどさりした とあるが、このときのぼくの心情の説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア まだ膝も治つていないのに姫に出場を強要されてとまどつてゐる。

イ 姫に膝が治つてゐるといふ証拠を突き付けられてたじろいでゐる。

ウ 知らないうちに姫がタイムを計つてゐたことを不快に思つてゐる。

エ 姫が自分のうそをみんなに言いふらすのではないかと恐れてゐる。

(六) 第四段落におけるぼくの心情の説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア 先生が声をかけてくれたおかげで姫の追及から逃れることができ

たが、膝のことを見透かされてゐるといふ不安をぬぐえないでゐる。

イ 姫に問い詰められて不利な立場に追い込まれたが、廊下に出てき

た先生が二人の間に入つてくれたので冷静さを取り戻してゐる。

ウ 情けない人間だと姫に軽べつされてゐるといふ思いから抜けきれ

ず、これからも今までどおり親友でいられるか気になつてゐる。

エ 自分の代役を探しさえすれば大会に出場しなくてもよいという見通しが立ち、これで姫から解放されると救われた思いになつてゐる。

三 次の①から④までの文中の傍線部について、漢字はその読みをひらがなで書き、カタカナは漢字で書きなさい。

① 彼女は将来を囑望されている。

② 命の大切さについて懇々と諭す。

③ 美術館はユウビン局の隣にあります。

④ 専門家の意見をウケタマワる機会があつた。

四 次の『花月草紙』の原文と現代語訳とを読んで、あとの(一)から(四)までの問いに答えなさい。

〔原文〕

ただうどは、漁船といへば、同じやうにつくるものと思ふべけれど、こはざつくりても、おのづからよくとのひて出来しもあり、こはよくかしこは悪しきもあり、打ち見てはいかにもよきが、乗り得てみれば違ふもありて、一つも同じからぬものぞかし。(中略)むかしある人が、「人を見て、いかにもよき人なり、いささかも悪しきところなきと思はば、まづ思ひかへして、聖は知らず、かしこき人とて、いづこもくまなくよき人はなきものなるを、さ見ゆるはわが心のくらみしなり。まづその人の悪しき処々よく知りてのちに、あげ用ひ給へ。」と、何がしがいひしと聞きしが、翁が船に乗るも、いまいふごととして悪しき処々を知れば、悪しきかたへは波かぜうけず、弱きには波かぜある日沖を乗らでありしかば、つひに危きをもまぬかれし。

〔現代語訳〕

素人は、漁船という、皆同じようにつくるものと思つているようであるが、これは同じようにつくっても、その中にはおのずとよく整つてできるものもあり、またこはよいがあそこは悪いというものもあり、ちよつと見るといかにもよいが、乗つてみると予想に反するものもあつて、③。(中略)昔ある人が、「人を見て、いかにもよい人である、少しも欠点がないと思うなら、まず考え直して、聖人ならいざ知らず、賢人といつても、どこも残らずよい人はいないものであるから、そう見えるのは自分の心がくらんでいるためである。まずその人の欠点をよく知つた後に、登用しなさい。」と、だれそれが言つたと聞いたが、私が船

に乗るのも、今言つたように船の悪い所を知つていたので、悪い方へは波風を受けず、弱い船では波風のある日に沖に出ることをしなかつたら、とうとう今まで危険な目をまぬがれたのである。

(一) ①「一つも同じからぬものぞかし」の現代語訳として ③ にあてはまる最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア 一つ一つがよく似ている イ 一つも満足にはできていない

ウ 一つだけ異なるものがある エ どれ一つとっても同じではない

(二) ②「ざ」の内容として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア 欠点がないわけではないように イ まったく欠点がないように

ウ 賢人であると評判が高いように エ 賢人の仲間に入るように

(三) 現代語訳の「残らず」ということは原文では何といつているか。それをそのまま抜き出して書きなさい。

(四) この文章の内容として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア 船には人と同様に長所も欠点もあるので、それらを熟知してその船に合った乗り方をするのが大切である。

イ 航海では予想外の危険に出くわすことがよくあるが、それを回避するためには経験を積むことが大切である。

ウ 同じようにつくつた船でも違いがあるように、人それぞれの持味を認めることが大切である。

エ 人には外見からはわからない意外な一面があるので、その人の本質を見抜くことが大切である。(問題はこれで終わりです。)